

甲 第 号

藤原 美子 学位請求論文

審 査 要 旨

奈 良 県 立 医 科 大 学

論文審査の要旨及び担当者

	委員長	教授	城戸 顕
論文審査担当者	委員	准教授	小川 宗宏
	委員(指導教員)	教授	田中 康仁

主論文

Usefulness of ultrasound in diagnosing long head of the biceps tendon malposition in patients with rotator cuff tears

腱板断裂患者の上腕二頭筋腱長頭位置異常の診断における超音波診断の有用性

Yoshiko Fujiwara, Syuichi Yamamoto, Yumi Kato, Shimpei Kurata, Shuhei Fujii,
Kazuya Inoue, Takashi Inoue, Takamitsu Mondori, Yoshiyuki Nakagawa, Yasuhito
Tanaka

Journal of Medical Ultrasonics 2022 Apr;49(2):289-295

論文審査の要旨

肩腱板断裂の多くは上腕二頭筋長頭腱(long head of the biceps tendon:LHBT)の損傷を伴い、またその病態は肩甲下筋腱(subscapularis SSC)の損傷と関連するとされている。LHBT病変の診断においてMRIの診断精度は高くなく、術前想定された所見と術中所見がしばしば異なる一方で、肩超音波検査(shoulder ultrasonography:SUS)は、動的観察が可能で形態の描出に優れているという特性から本病変への応用が期待されている。本研究の目的は、術前SUSの腱板断裂患者におけるLHBTの病変把握およびSSC断裂の予測への有用性を検証することである。腱板断裂の治療のため肩関節鏡視下手術を受けた患者331名(365肩)を対象としSUSとMRIの診断精度について感度、特異度、および正診率を検討した。SUSは感度92%、特異度90%、正診率91%、MRIは74%、84%、80%でありSUSが有意にMRIに優越していた。またSSC断裂の予測に関する多変量解析ではSUSのみが有意な因子であった。以上の結果から申請者はSUSが腱板断裂患者の術前において、LHBT病変把握とSSC断裂の予測に有用な診断手段であると結論づけた。質疑応答では腱板修復後の脱臼病態の経緯、検査肢位の統一方法、検者のラーニングカーブ、検者間誤差、術前予測の臨床的意義について問われ、術後SUSは行なっておらず長期経過が不明であることなど課題を残すものの、教育プログラムを受講した検者で研究を行っており検者間誤差を認めなかったこと、術前予測が術式選択等に有用なことなど適切に回答された。

この結果は、肩関節の機能再建の臨床において治療選択の一助になり、その発展につながる有意義な臨床研究であると評価され、博士(医学)の学位に値すると考える。

参 考 論 文

1. 臨床検査科での肩超音波検査研修プログラムの試み
藤原 美子、超音波医学 Vol.49 (オンラインファースト)
2. 装具による足関節固定時の深部静脈血栓症予防対策 下腿運動量に伴う
深部静脈血流の変化
藤原 美子、超音波医学 (1346-1176)45 卷 3 号 Page311-316(2018.05)
3. 【超音波診断・治療の最前線】さまざまな病態に対する超音波診断 深
部静脈血栓症
富和 清訓(奈良県立医科大学 整形外科), 藤原 美子, 門野 邦彦, 熊井
司, 田中 康仁
整形外科(0030-5901)66 卷 8 号 Page864-868(2015.07)

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに運動器再建医学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

令和4年6月14日

学位審査委員長

リハビリテーション医学

教授 城戸 顕

学位審査委員

運動器再建医学

准教授 小川 宗宏

学位審査委員(指導教員)

運動器再建医学

教授 田中 康仁